

「人と動物の婚姻譚」の二つのジャンル

——アムール・サハリン地域の伝承から——

荻原真子

はじめに

日本海の北方に当たるソ連の極東部、すなわちアムール川、沿海州、サハリンの地域には人と動物をめぐる伝承が豊富にある。この地域の原住人にはナナイ(人口二二〇〇〇人、一九七九年、以下同じ)、ウリチ(二六〇〇人)、オロチ(二二〇〇人)、ウデヘ(一六〇〇人)、ネギダル(五〇〇人)、ウイルタ(オロッコ)族(?)がおり、この諸族の言語は分類上トウングース・満州語グループに含まれる。アムール川の河口地域とサハリンにはニブヒ族(四四〇〇人)がおり、その言語はバレオアジア諸語に分類されている。この地域の原住民は近年まで狩猟や漁労を主とする経済生活を維持してきた。漁労は基本的にはサケ・マス漁であり、これは夏秋の生業であった。冬から春には、山野で獣の狩りをした。沿岸ではアザラシ狩りが行われた。このような採集狩猟経済はこの地域に共通度の高い文化を育んだ。そして、アイヌの文化もまずはこのアムール・サハリン地

域の文化圏の一環として捉えられる。

ここでは人間と自然の関わりは殊の外深くまた緊密である。生活が元来自然と一体であったことは想像に難くないが、狩猟民が悠久の昔から日々の営みのなかで自然をどのように観じ、理解し、観念化していたかは民間伝承に見事に投影されている。

豊富にある伝承で特に大きな比重を占めているのは人と動物をめぐる伝承であるが、そのなかでも人と動物の婚姻をテーマとする伝承はさまざまなモチーフをもち、多様な展開をみせている。

「人と動物の婚姻譚」の背景

(a) アムール・サハリン地域の諸民族の間に広く認められる「人と動物をめぐる」伝承には、多くの陸海の動物と人間とのかかわりが語られるが、なかでも虎、熊、シヤチはきわだつた存在とみなされている。これらの動物は特別に慈悲深く、人間に温情を示す。陸と海の巨獣のこのような相貌には、いわゆる「獣の主」としての特

徴が見られる。特に虎とシヤチは、窮地にある人間に無償で獲物を提供する。両者は自身が「獣の主」として現れる場合もあれば、天神や海神というより大きな意志的存在の代行者である場合もある。その点では熊はいささか世知辛い。熊は、例えば、山中で道に迷った狩人を一冬自分の巣穴に保護して温情を示した時に、心ず返礼を要求する。「獣の主」としての熊はどうやら「熊族の主」家長であるらしく、この「熊族の主」家長は人間に獲物としての熊は下賜するが、山野の動物たちのすべてを掌握しているようではないらしい。熊のこのような性格はアムール・サハリン地域での特徴の一つであって、北アジアの他の諸族では熊はしばしば「獣の主」と報告されている。

(b) 「動物」はその本質において「人」であるという観念もまたアムール・サハリン地域の伝承の特徴の一つである。人間の着衣の習慣を動物にあてはめるなら、動物の毛皮は外衣でなければならぬ。それゆえ動物の動物としての姿形は仮の姿であり、彼らはその住家に帰れば、毛皮の外衣を脱いで「人」になる。このような毛皮や羽毛の脱着の観念は実はアムール・サハリン地域ばかりでなく、北太平洋の沿岸地域一体にあまねく広がっており、カムチャッカ半島やベーリング海域のコリヤク、チュクチ、エスキモーなどや北西岸のインディアンにも共通して認められる。そしてここでもまた人と動物の婚姻譚は盛行している。

(c) 動物が本質において「人」であるとすれば、山や森に棲んでいるのは虎や熊の姿をもつ「山のヒト」であり、海にいたるのはシヤチやアザラシ、トドの姿をした「海のヒト」である。彼らは「人」

の姿をした「人間」の世界へ現われるときには、仮装の姿になる。しかし、時にはこの人間世界でも秘かに「人」になることがある。海岸に大勢の白衣の「人」が戯れているところへ人間の男が近づくと、彼らは一斉に海に飛び込み、次ぎの瞬間、波間に現われたのはシヤチの群れであったとニブヒの伝承にある。そして、そのなかに水死した兄弟や同胞を見いだすという伝承もある。山頂にいたる熊の家族を訪れた狩人に、その家の主人である老人は「われわれは川上のヒトだが、おまえさんは川下のヒトだ」と言う。このように山や森、海や川、天と地上にはそれぞれに「ヒト」が棲みわけて固有の領域をなしているのだという観念は、何れの言語においても「ヒト」と「人」に同一の語が与えられていることから明らかである。ただし、アイヌは動物「ヒト」に対してカムイの語をあて、「人」アイヌと区別している。

(d) 毛皮や羽毛の脱着によって「ヒト」にも動物にもなるといういわゆる変身は、したがって動物に固有の特性であるといえよう。人と動物の婚姻は正にこのような動物の変身性によって実現される。人がその配偶者の動物と共に山や海で暮らすことができ、また動物が人間世界で暮らすことができるのは動物の「ヒト」としての存在の様態においてである。人間は動物には変身しない。人間は実像も虚像も「人」である。

ところが変身性は人間にも援用される。人間もまたしごく容易に動物になりうるという伝承は熊との交情や婚姻にかかわり、これに限られているように思われる。このことは慎重に考えてみなければならない。人間の娘が熊に変身して「山のヒト」になるには何か特

別なステップを経なければならぬはずである。人間ばかりは着衣の有無にかかわらずなく「人」なのだから、どうして人間の娘が熊になり得ようか。(この点で連想されるのは狼に変身して雪原を疾走するコリヤクの女シャマンである。)

神話と英雄叙事詩

人と動物の婚姻をテーマとする伝承は一般に神話、昔話を内容とするジャンル (Jelmu - オロチ、Telungu - ウリチ、Telungu - ナーナイ、Tybandu - ニビヒ) に含まれる傾向にある。しかしながら、伝承のテキストを仔細に眺めてみると、ある特異なモチーフが加わることによつて、伝承が思わぬ展開を見せることがある。それは、人間に対する選別である。すなわち一人の人間が獣によつて特別に選ばれ、続く話のなかで英雄的な主人公になる。また、婚姻では選別された人間が獣との婚姻に忌避を示しながらもなおその宿命から逃れられないというモチーフである。そして、それはしばしば近い死を暗示している。このようなモチーフが本質的に何を意味しているかは、例えば、ニビヒのもう一つのジャンルである英雄説話ナストゥンド *nastund* を対比させて見ると明らかになる。このジャンルの伝承では、人と動物のかかわりは一変し、両者の間の友好関係も婚姻も容赦なく排斥される。虎は滅ぼされ、熊もまた人間の英雄に對抗して破滅する。邪悪なシャマンに化けた熊は、占いをやるうちに本性を顕して、英雄に殺される。人間の女を連れ去った熊は復讐される。このような武勇はすべて英雄の遍歴に組み込まれている。

英雄説話には概してシャマニズムの世界観が色濃く映しだされている。シャマンや鉄文化の要素、死と再生、悪鬼と憎悪、闘争と復讐などのモチーフは神話や説話 (例えば、ニビヒのトイルグント) には無縁である。後者では人と動物との間には些かの対立も矛盾もない。不調和は調整され絶対的な対立にはならない。

結論に代えて

もっとも素朴な、祖型と言つてもよいであろう「人と動物の婚姻」の伝承が、奇しくも日本の北方、太平洋の沿岸地域にあたかも〈堆積〉しているのはどういうわけであろうか。ここに人類史の遠い過去の狩猟民世界を重ねてみることは不当であろうか。ここに見られるような人と動物の婚姻譚のなかからヨーロッパの牧農民は、結局のところ自然の動物を完全に排除し、代わりに魔法によつて仮初の動物になった王子や姫を登場させた。日本の稲作民はせっかく「人」になった動物たちの正体をあばいて人間世界から追放してしまった。どちらの場合にもこのような伝承が生れるには社会的な要因や価値観の変化が関連している。

しかし、一方で本質的には狩猟経済を保持しつづけてきた社会においても同一のテーマをもつ人と動物の婚姻譚に微妙な変化が生じていることが認められる。これは神話から英雄叙事詩への分解過程とみることができよう。このような、口承文芸の異なるジャンルの生成がどのようなきっかけによつて生ずるものかを推察することは、同時にそれを担う社会の歴史を復元することにもつながるであろう。

と読む。

【文献】

- V. A. Avrorin 1986 Materialy po nanaiskomu iazyku i folkloru (ナナイ語と民間伝承の資料) / Leningrad
- V. A. Avrorin, E. P. Lebedeva 1966 Orochskie skazki i mify (ネロチ族の昔話と神話) / Novosibirsk
- O. P. Sunik 1985 Učeskii iazyk (ウチシ語) / Leningrad
- L. Ia. Shternberg 1908 Materialy po izucheniiu giliatskago iazyka i folklor (キリヤク語と民間伝承の研究資料) / St. Petersburg.
- 1916 Antichngi Kult' Bliznetsov pri svete etnografi. Sbornik Muzeia Antropologii i Ethnografi. t. III. Leningrad
- 1918 Izbrannichestvo v religii. Leningrad. (宗教における聖護)
- 1924 Divine Election in Primitive religion. XXIIe Congres International des Americanistes. p. 472-512.
- V. I. Tsintsius 1982 Negidal'skii iazyk (ネギダル語) / Leningrad
- 郎 櫻 一九八五 「中国少数民族のトータル神話―伝説および日本への流伝」君島久子編『民間伝承の源流』三五五―三八〇頁、小学館
- 小澤俊夫 一九七九 『世界の民話―ひとと動物との婚姻譚』中公新書
- 小松和彦 一九八七 『説話の宇宙』人文書院

田中克彦 一九七七 『北方系神話』について、伊藤清司・大
林太良編『日本神話研究Ⅰ』一七九―一八六頁、学生社
V・プロップ(斎藤君子訳) 一九八六 『ロシア昔話』せりか
書房
(おぎはら・しんご／東京国際大学)